

Thomas Seifrid, *The Word Made Self: Russian Writings on Language, 1860-1930*
(Ithaca and London: Cornell UP, 2005)

■ベセーダ予告から

ロシアの独自の言語論の系譜を明快に示したのものとして、ここ数年、ロシア思想史・文学理論などの領域で影響力をもつ著書。ロシア思想史・文学理論などの領域で影響力をもつ著書。日本でも言及する研究者が増えている。その議論の精度と射程について論じ合いたい。

■なぜこの本を取り上げるか：貝澤他 2003:10-11. プラトニズム研究会、思想史学会。

ロシアの宗教思想と言語思想に関する近年の研究成果を統合することに成功している。ベールイやフロレンスキイだけでなく、現象学（シュペート、ローセフなど）まで議論の枠に取り込み、ひじょうに広い思想地図を描き出している。ポテブニャから始めるところに工夫。二つの流れの合流という図式。

■トマス・セイフリッド…南カリフォルニア大学 (USC) スラブ語・文学科教授

本書の他に *Andrei Platonov: Uncertainties of Spirit*, Cambridge and New York: Cambridge UP, 1992; *A Companion to Andrei Platonov's the Foundation Pit*, Academic Studies Press, 2009 がある。論文多数。ナボコフやパステルナークについての論文もある。本書との関連が深いものとしては: "Хайдеггер и русские о языке и бытии," *Новое литературное обозрение* № 53:1 (2002): 64-74; "Roman Jakobson's Sculptural Myth," *Annals of Scholarship* Vol.14, no.2 (Fall 2000): 25-36 など。

■本書の構成

序論

第1章 ポテブニャとロシアの言語思想の再生 (Potebnia and the Revival of Russian Thought about Language)

第2章 二〇世紀初頭のロシアの「ロゴス」の文化 (Russia's Culture of *Logos* in the Early Twentieth Century)

第3章 正教的実在論とその近代思想との対話 (Orthodox Essentialism and Its Dialogue with Modern Thought)

第4章 現象学のプリズムを通して (Through the Prism of Phenomenology)

結論

■序論 (1-5)

ロシアでは伝統的に言語の力へのなかば宗教的、ほとんど物神的な崇敬がしばしば語られてきた。それが目覚ましく現れたのが 20 世紀初頭の文学であることはよく知られている: シンボリズム、未来派、フォルマリズム、バフチンなど。

だが、より大きな流れとしては、おおよそ 1860–1930 年により深く、より広い言語思想の隆盛が認められる。たんに詩人だけでなく、言語学、哲学、宗教ルネサンス、文学研究などさまざまな領域、かつアカデミックな研究から詩人たちの宣言にいたるまでさまざまなレベルで。そこにはある一体性 (coherence) が存在する。

その一体性の中心には「言葉に根拠づけられた自己ないし自我のモデルを提供しようとする努力 (the effort to provide a model of the self or of selfhood that is grounded in language, 2)」が認められる。言いかえると、言葉に自己・自我のモデルを見いだそうとする試み。ハイデガーの「言葉は存在のすみか」という考えを先取りするもの。

そうした言語志向的な思想傾向は二つの流れから影響を受けている。一つは 19 世紀の西欧（とくにドイツ）の思想・学問であり、もう一つは正教の伝統的思想である。

銀の時代の詩人たち、フォルマリズムやバフチン、ロトマンなどの西側の影響を考えれば、こうしたロシアの言語志向的な伝統を明らかにすることには大きな意味があろう。また、ドイツのヘーゲルやハイデガー、ガダマーとの親和性も明らかになろう。

<本書の題名 Word Made Self の意味>

■第1章 ポテブニャとロシアの言語思想の再生 (7–52)

アレクサンドル・アフアナシエヴィチ・ポテブニャ (1835–91) ウクライナの言語学者、ハリコフ大学教授<⇒貝澤他 2012: 216–217>

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの思想をロシアに導入した点を重視。

プラトン『クラテュロス』以来の言語をめぐる論争。ギリシア、ラテンにおける文法の形成 (ヴァロ、2c; プリスキアヌス、6c など); 言語を複雑な、だが一定のルールに基づく体系とみる立場。

中世になると上記のような文法学派とスコラ哲学・神学を組み合わせようとする試み。言語の研究は人間理性や世界そのものの知にも至るという信念; 实在論 (realism) と唯名論 (nominalism) の論争 (⇒山内志朗『普遍論争』)

16–18 世紀には経験主義 (empiricism) vs 合理主義 (rationalism) の構図。後者の代表としてポール・ロワイヤル『一般理性文法』[1660]『論理学』[1662]など。諸言語は共通の文法法則をもっているはずであり、かつそれは人間理性のあり方につながっているはずだという信念。近代の普遍言語の試みやチョムスキーなど。一方で、経験主義的な流れからは比較言語学が生じた。(フリードリッヒ・シュレーゲル「インド人の言語と知恵について」[1808])。サンスクリット研究に始まるインド=ヨーロッパ語族研究は 19 世紀の言語学の最大の成果と言ってよいが、それと並行して「言語の存在論を定め、思考との関連で言語の一般理論を定式化しようとする努力 (efforts to define the ontology of language and formulate a general theory of language in its relation to thought, 22) が存在し続けた (コンディヤック『人間認識起源論』[1746]、ヘルダー『言語起源論』[1772])。人間の理性と言語の発展は不可分であるという立場。集大成的な業績としてフンボルト『人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について (邦題: 言語と精神)』[1836]: エルゴン (作られたもの) / エネルゲイア (作られつつあるもの・活動)、自己の存在論に直接関わるものとしての言語、民族の精神を現すものとしての言語、内的形式などの諸概念・定式。「もちろんフンボルトの言う《内的言語形式》という概念はまだきわめて不明確である。事実彼はこの概念を自分で説明したことは一度もなく、章の表題として二

度使っているにすぎない」(ヘルビヒ 1972: 15)

ロシアないし東方正教会独自の言語論の伝統(23-)。とくに重要なのはヘシュカスム(静寂主義)、グレゴリオス・パラマス(1296?-1359)の神のウーシア(本質)/エネルゲイア(働き)の定式。19世紀後半の讃名派(imyaslavie)論争(「神の名には神自身が存在する」修道士イラリオン) <=>この伝統への注目そのものは以前からあった、桑野 2003:176-177 参照、また日本での研究としては渡辺 2010 >

中世ロシアの宗教文献(16世紀の *Beseda o uchenii gramote* など、26)。メレーチー・スモトリツキーやロモノソフによる文法の整備の一方で、言語への宗教的・神学的なアプローチの伝統は続いた：ラジーシチェフ「人間について、その死すべき運命と不死性について」[1792]の言語についての箇所。19世紀のロシアの言語学はドイツと同様比較言語学が主流だったが、ヘルダー=フンボルト的な流れも存続。ブスラーエフ、スズネフスキー、K. アクサーコフら(29) - 民族性が位置する場としての言語。

こうして19世紀後半にはドイツからの影響と正教の伝統の二つが「言語の存在論」を指し示していたが、その両者を統合したのがポテブニャである(30)。その主著『思考と言語』1862はフンボルトの『言語と精神』に基づいたものと見ることができる：“ne delo, a deiatel’ nost”の定式、対話の重視、社会的交通に近い考え方、言語を通じての自己認識(34)、内的形式(35-)など。

ポテブニャの内的形式論。外的形式-内容(概念)-内的形式；「語の内的形式とは、思考の内容が意識に対して持つ関係のことである。それは人間が自分自身の思考をどう受け取るかを表す」「それ〔内的形式〕は対象のイメージでなく、イメージのイメージ、すなわち表象である」。またポテブニャはしばしば語の内的形式を語源論的に捉えようとした(oko/okno, stl/stol, 40)。語や言語のうちに詩的原理をみようとする態度。内的形式が失われることによって語は「散文的」に墮する(42)。

ポテブニャが slovo という語を広い意味で使っていること。ロシアにおける logos の伝統。なぜフンボルト=ポテブニャの内的形式論がロシアでかくも大きく花開いたか。ロシアの伝統とドイツ・ロマン主義の結びつき。<エネルゲイアの二つの文脈・二つの意味、180>

以下の展開：シュペート『言葉の内的形式』1927。ポテブニャへの言及はないが、フンボルトとプラトニズム(エイドス、ロゴス、アイデアなどの概念)、正教思想の伝統(ヘシュカスムやイコンなど、45-50)。「言語哲学と神学的基層のパラレル性」(50)、「自己のすみかとしての言語」(51)。フロレンスキイ、セルゲイ・ブルガーコフやローセフでも同じ構図が認められる。

■第2章 二〇世紀初頭のロシアの「ロゴス」の文化(53-81)

19世紀末-20世紀初頭のロシア思想においてポテブニャが果たした役割：プラトニズム的な正教思想の伝統とドイツの言語学や心理学、哲学との交流が容易かつ盛んになったこと(53)。その意味で彼の影響はこれまで言われてきたより長く、広い。その全体図を描くのがこの章の課題。

ポテブニャの直系の弟子たち：オフシャンニコ=クリコフスキー、ゴルンフェルド、ハリツェフなど。言葉の内的形式の主特徴としての「形象性、イメージ性 obraznost’」。ポゴージン『創造としての言語』[1913]。ポテブニャの基本思想を生かしつつ、心理学的アプローチを発展させる：幼児の言語習得や失語症の研究など。その他、レージン(雑誌『創造の理論と心理学の諸問題』[1907-1923]の編集者)の論文「思考の独特な節約としての芸術創造」[1911]、オフシャンニコ=クリコフスキー『詩と散文の理論』

[1909]など。言語と詩のアナロジー、受け手（読者）の要素の重視など(56)。他派との論争の中で思考と言語、記号の性質をめぐる論争も始まっていた(57-58)。

シンボリストたち、とりわけベールイ (59-) : 「思考と言語 : A.A.ポテブニャの言語哲学」 [1910]、「言葉の魔術」、「意味のエンブレマチカ」など。新カント派やニーチェとの組み合わせでの受容・解釈。言語＝シンボルの実在性と中心性の強調。正教思想の伝統の意識 (lik, logos などの概念) : ポテブニャでは明示されなかったこの伝統を強く打ち出したと評価できる。

新カント派、カント哲学とのせめぎ合い (64) <⇒20世紀初頭のロシア思想にとってのカント哲学の意味については北見論 (2012: 113-116) がわかりやすい>

シンボリストたちのグロッサリアや未来派詩人たちの「言葉そのもの」「自律的な言葉」の考えもポテブニャと無縁でない (66-)。

フォルマリストたち : 初期の問題設定 (詩的言語研究の重要性、詩的言語／日常言語の対置など) はポテブニャ (あるいはベールイを介してのポテブニャ) から来ている (70-)。シクロフスキー「言葉の復活」 [1914]の冒頭、「あらゆる言葉は元来、比喩であった」など。彼のいくつかの表現 (「言葉の復活」や「イメージが死んでいる／イメージの再生」、「時代に顔を与える」など) にこの時代に強まっていた宗教的コノテーションも見て取れる。

マンデリスターム : 言葉の自律性と人格化。論文「言語と文化」、「言葉の本性について」など。讃名派論争 (1912-1913) の影響。<「詩は内なる形象によって、つまり書かれた詩に先行して鳴り響く形式の型によって、生きたものとなる」マンデリスターム 1999: 26、斉藤氏の注も>

ウラジーミル・エルン『ロゴスのための闘い』 [1911]ではさらにはっきりと正教思想の伝統が前景化・主題化されていく (78-)。エルンについて。<⇒貝澤 2008>

■第3章 正教の本質論とその近代思想との対話 (82-129)

20世紀初頭、アカデミズムから広く文学界・思想界に言語論の影響力が広がっていく。「人格 lichnost」や「自己」の概念が中心的なものとなる。心理学の隆盛ともつながっている (モスクワ心理学協会や雑誌『哲学と心理学の問題』など)。一方では唯物論、他方では新カント派的な超越論的主観主義に抗するという思想的課題。何らかの新しいタイプの存在論、「具体的な形而上学」を求める流れ (83)。いわゆるロシア宗教ルネサンスの哲学的テーマ : 正教思想の伝統と (フンボルト＝ポテブニャ的な) 言語思想の組み合わせからなる形而上学 (存在論) の構築。その代表的思想家としてパーヴェル・フロレンスキイ (1882-1937) とセルゲイ・ブルガーコフ (1871-1944)。

フロレンスキイの思想的背景は一方では正教思想やウラジーミル・ソロヴィヨフの「全一思想」に求められる。だが一方では、数学を専門的に学び (モスクワ大学での指導教授はベールイの父親の数学者ニコライ・ブガーエフだった)、「世界観の要素としての非連続性」について学位論文を書いている (85)。銀の時代を代表する百科全書的な人物<⇒フロレンスキイ 1998 解説、貝澤他 2012: 215-216 など>

『真理の柱と基礎』 : 近代的な合理主義の批判、同一律 (law of identity: A = A) の批判。真理論 : istina<estina<est' 「在るところのもの」 ; aleteia<a-leteia 「忘れられていないもの」。真理は命題と対象の照応に求められるのではなく、存在そのもの (存在＝本質の開け) に求められる。真理とは。「自らをもって獲得され、証明される主体 (a Subject qui per se ipsum concipitur et demonstratur)」としての存

在。合理主義は世界をモノ（res）として取り扱う。形而上学（存在論）は主体＝人格からなるものとして世界を扱う。さらに三位一体（至聖三者）の理念と合致するものとして：I-Thou-He となる対話－“Truth contemplates itself through an Other in a Third: Father, Son, Spirit” (91)。

フロレンスキイの言語論は論集『思考と言語』に多くある。そこで彼が見せている問題関心は西欧哲学の「言語論的転回」と軌を一にするものが多い。

アンチノミー（二律背反）への強い関心：論文「言語の二律背反」でフンボルト以来のエルゴンとエネルゲイアの問題を取り上げている。言語はエルゴンでもあり、エネルゲイアでもあるという結論に達している。言語の作られたもの・完成態的な面とつねに生成変化する面のせめぎ合い。＜「しかし、言語とはエルゴンとエネルゲイア、つまり「物」と「生」の生きた平衡状態である。より正確に言うと、この対立によってこそ、そしてその対立が最大限に鋭い場合において、言語というものが存在できるのである」フロレンスキイ 1998: 178＞

名の重視；論文「哲学的前提としての讃名」。名は、たんにその持ち主がどんな性質かを伝えるだけでなく、その持ち主の本質を開示する主たる器官である。＜「広義では言葉とは、わたしたちの本質を外部に自主的に顕現したもののすべてを指す」フロレンスキイ 1998: 315-316＞

フロレンスキイの思想のより哲学的な説明（107-115）。

セルゲイ・ブルガーコフ：『名前の哲学』[1918－1919 執筆]＜この著作のさまざまな評価については 堀江 2005: 4-6＞。セイフリッドはボネツカヤらと同じく、言語哲学の展開、ハイデガーとの近さ（119）などのラインで読む。言語が人間と世界を基礎づけることを示す形而上学的書。20 世紀の欧米の言語哲学の分布図の中では前期ウィトゲンシュタインや『存在と時間』のハイデガーに近いだろう（122－123）。

超越的な主語＝存在、宇宙が、越境機能である連辞、エネルゲイアを介して、イデア＝述語に接触し、これによって自己命名し、「体」を纏い名前が誕生し内在化すると言語が出来る。このようにして我々は、言葉の背後にウーシア・エネルゲイアという東方正教会の神性構造が移植され、同時に神性構造が文法的な主述関係に擬えられることを見る。（堀江 2005: 9）

セイフリッドもほぼ同じ結論「ブルガーコフは、言葉の指示性と構造についての理論を形而上学へと翻訳することによって、実質的にポテブニャを正教の存在論的教義へと変容させた」（128）。言葉とイコンの対比。

■第4章 存在論のプリズムを通して（130－201）

フロレンスキイとブルガーコフが言語哲学と正教思想を一体化する作業に主題的に取り組んだとすれば、同じ時期に「言語と自己」の問題に取り組んだもう一つの重要な流れが現象学である。この章ではグスタフ・シュペート（1879－1938）、アレクセイ・ローセフ（1893－1988）。

「ロシアにおける現象学」ではアレクサンダー・ハールトの大著が基本文献となっている（Alexander Haardt, Husserl in Russland. *Phaenomenologie der Sprache und Kunst bei Gustav Spet und Aleksej Losev*, Munich: Wilhelm Fink Verlag, 1992）。ロシアではシチェドリナの編集と解釈、最近では英国でチハーノフの編になるシュペート論集も出た。

19世紀末～20世紀初頭のロシア哲学界では唯物論・実証主義に抗するかたちでの観念論の復活があったが、これにはより世俗的—認識論的バージョンとより宗教的—存在論的バージョンがあった。新カント派のゲオルギー・チェルバーノフ(1862-1936)やアレクサンドル・ヴヴェジェンスキー(1856-1925)らは前者に属し、セルゲイ・トルベツコイ(1862-1905)やニコライ・ロスキイ(1870-1965)は後者に属した。唯物論や実証主義という共通の敵を前にたがいに影響を及ぼしていた。だが、20世紀に入ると、反心理主義=反新カント派の流れが強まり、宗教的—存在論的な観念論が隆盛をみる。ロシアにおける現象学の受容にはこうした背景があった。ロスキイとフッサールの近さなど(133)。20世紀初頭のロシア思想界の「syncretism and the hybrid form of thoughts」(133)を背景にフッサールは「quasi-religious doctrine」のように受容された面がある(133)：存在論的現象学、『論理学研究』(初期フッサール)、プラトニズム化。シュペートのフッサール解釈はその典型。『イデーニ I』[1913]で打ち出されたとされる超越論的現象学の議論にはわりと批判的。＜ドイツ本国でのフッサール受容については以下の記述＞

本格的な存在論の復権と新しい存在論の試みがなされるようになるのは20世紀になってからであり、その出発点となったのはフッサールの現象学であった。(…)彼の存在論はいわゆる形相学であって、その点ではなお本質に優位をおく意識哲学の影響を残すものであった。それに対しN.ハルトマンは、現象学から出発しながらも、意識から独立して存在すること(自体存在する対象)を認め、そのような存在者の普遍的な存在性格を階層的・範疇的關係において捉えることを試みた。(『岩波哲学・思想事典』999)

初期の現象学運動は彼の『論理学研究』におけるカテゴリー的直観の概念に共鳴した。その代表者の一人シェーラーは、現象学の特質を、「世界ないし事象そのものとの最も生き生きした強い直接的な体験の交通」であるとする。しかも体験と直観においてそれ自体そこに存在するのは先天的に純粋な本質として与えられるのであり、本質は所与内容のうちに与えられる理想的意味統一と考へ、意識による構成というフッサールの超越論的現象学を直接的直観からの逸脱と批判した。(『岩波哲学・思想事典』1509-1510)

シュペートは現象学と並んで、解釈学にも強い関心を示した(149)：『解釈学とその諸問題』[1918]、記号、意味、表現などについての考察。『言葉の内的形式』、『美的断章』ではポテブニャの名前は出てこないが、ポテブニャ的関心(内的形式、言葉と詩のアナロジーなど)が明らか。シュペートは言葉の内的形式を「語義の発展の法則」と見ている(161)。ガダマーとの対比(164)。

アレクセイ・ローセフ：ロシアにおける現象学の展開を見るとき重要な第二の思想家。また、本書で論じてきた「言語と自己」の問い—正教思想の伝統とドイツの言語思想の対話のなかで—が他の思想家以上に前景化・主題化されている(166)。上述のようなシンクレティックなロシアの思想・哲学を背景としたきわめて広い教養。後に収容所から妻にあてた手紙の中で「わたしの世界観においては有限な空間からなる古代の宇宙と^{コスモス}アインシュタインが統合されている。そしてまた、スコラ哲学と新カント派、

修道院と結婚生活、数学と音楽の要素をあわせた西欧の洗練された主観主義と東方のヘシュカスム的存在論とが統合されている」と語っている (168)。

1919年から1921年はニージニー・ノヴゴロド大学で教鞭、1921年から1930年はГАХН (芸術科学アカデミー)の美学部門の主任をつとめる (彼の師シュペートは1929年まで同アカデミーの副総裁だった)。1920年代末、活発な執筆を行っていたが、『神話の弁証法』の検閲で削られた箇所を勝手に「復元」して出版したことによって逮捕され、収容所に送られる。拘留中に半失明状態に陥ったことや有力者の口添えによって33年には釈放される。1942年以後、モスクワ大学論理学の教鞭をとる。1950年代以降1988年の死まで、ふたたび精力的な執筆時期に入る (ただしその時期の著作は本書の検討から外れる)。<⇒ローセフ 2006 の解説や大須賀 2006 も>

ローセフと現象学 (169)。諸説あるが、1910年代にはフッサールを読んでいたことはほぼ確実。1920年代のローセフの著述にはフッサールの影響が色濃い (新カント派批判、唯物論批判、フッサールのエポケーとローセフの否定神学的志向、数学への関心など) (172)。

だが、ローセフにとって現象学は乗り越えるべき対象であった (173)。彼にとって現象学は十分に存在論化されていない。新プラトン主義的伝統への強い志向 (プロティノス、プロクロス、擬ディオニュシオスなど) —これは正教思想の伝統だが、20世紀初頭の西欧における新プラトン主義研究の隆盛の影響の面もある (175)。存在の階層性 (善一者—知性—魂—物体)、流出の概念など。他方でヘーゲルと弁証法への関心 (179-)。<『神話学序説』から:「神話は人格の実体的な自己確立ではなく、人格の

エネルゲイア的な自己確立なのである。それは人格をその奥深い最終的な根源において確立するものではなく、発現的、表現的な機能において確立するものである」(ローセフ 2006: 137、強調原文)。表現 (な

いし現象)とは本質のエネルゲイア的な現れという図式。「弁証法的には本質と現象は互いを前提し合う。

(a)もし、本質が存在するなら、それは何かである。(…) 本質があり、その現象もあるか、あるいは本質の現象はなく、それが本質であるとも、それが概して存在するとも言うべきではないかのいずれかである。こうして、カント的な「物自体」の形而上学は、弁証法がほんのわずかでも関われば崩壊するのである」ローセフ 2006: 185-186、強調原文)。本質と現象を結びつけるものはシンボル (言葉=名) >

ローセフのフィリオクェ批判 (198-)

■結論 (202-222)

本書では19世紀後半から20世紀前半にかけてのロシア文化のさまざまな分野において言語論的な考え方が大きな役割を果たしてきたことを見てきた。一方では正教会の伝統、他方ではフンボルト=ポテブニャ的なより近代的な言語観を合わせたような流れ。結論では、本論で取り上げなかった他の人物 (ソ連時代の) に触れる。

レフ・ヴィゴツキー『思考と言語 (Myshlenie i rech')』[1934]。フンボルト=ポテブニャ的概念系、用語法が認められる。内言の議論のフンボルト的な背景 (205)。

ヴォローシノフ『マルクス主義と言語哲学』[1929]。彼はソヴィエトにおける言語哲学への関心の高まりの例としてシュペートとローセフを挙げている。内言もまた社会的記号の場と見た点にヴォローシノ

フの〈自己と言語〉の理論への功績(208-9)。

バフチン：『小説の言葉』[1934-35]。この本は小説についての本であると同時に「自己についての言葉(a discourse about the self)でもある」(211)。〈対話〉や〈ポリフォニー〉も社会構成員がより多くの声を挙げていくことが問題なのではなく、むしろ内なる自己が複数的な声によって豊かになることが主題。「ハーバーマスの先行者であるよりはプラトンの後継者」というチハーノフの評価(211)。

ヤコブソン：現象学やシュペートとの関わり。論文「プーシキンの詩的神話における彫像」[1937]などにおける現象学の影響。フッサールは1935年にプラハに来て、プラハ言語学サークルで講演もしている(214)。その一方で、新プラトニズムの流れも(218-)：彫像のモチーフがプロティノスにある。またヤコブソン自身、この論文でプーシキンやブローク、マヤコフスキーでさえ正教会のシンボル体系に満ちていると主張している(222)。

■コメントなど

- ・個別的な研究が進んでいる中、全体的な図を描きにくい20世紀初頭のロシアの言語論や宗教哲学に統一的な文脈を与えた点で「役に立つ」本。ソロヴィヨフでなくポテブニャで始めたところに工夫がある。〈西欧の影響とロシア独自の伝統〉という昔ながらの(不毛な)対立も解決できている。
- ・個別の思想家、作家の研究としては食い足りないところ、強引と見えるところもあろう。
- ・フンボルトの言語論の〈保守的〉な面：「言語はいわば民族の精神の外的な現れであり、民族の言語はその精神であり、民族の精神はその言語であって、両者をどんなに同一のものと考えても十分すぎることはない」「言語の構造が…異なっているのは、それが諸国民の精神的な特性そのものだからである」(引用は遠藤2005:9から)。こうした面はポテブニャ以後のロシアの言語思想にも引き継がれていると見える。この問題はもう少し掘り下げられるだろう。Cf. ドイツでもフンボルト的言語思想はいくつかの形で甦ったと、ヘルビヒ1972:15-16, 23-27, 29-32。

■使用文献

『岩波哲学・思想事典』(1998) 廣松渉他編、岩波書店。

遠藤龍二(2005)「フンボルトの「内的な言語形式」について」『図書館情報メディア研究』筑波大学大学院、3巻1号。

大須賀史和(2006)「ローセフとプラトン主義：『神話の弁証法』における概念構成をめぐって」『プラトンとロシア』Ⅰ

大須賀史和(2007)「ローセフとプラトン主義(2)：『神話の弁証法』(1930年)における宗教哲学」『プラトンとロシア』Ⅱ

貝澤哉(2007)「対話化されるアイデア：バフチンのドストエフスキイ論とロシア・プラトニズムのコンテクスト」『ユリイカ』39巻13号。

貝澤哉(2008)「ウラジーミル・エルンのプラトン論—「プラトン最高の解脱」(1917)について」『プラトンとロシア』Ⅲ。

貝澤哉・野中進・中村唯史編(2012)『再考ロシア・フォルマリズム：言語、メディア、知覚』せりか書房。

北見論(2012)「言語と世界構成—ロシア宗教ルネサンスの言語論とフォルマリズム」、貝澤哉他編『再

考ロシア・フォルマリズム：言語、メディア、知覚』せりか書房。

木部敬 (2010) 「G.G.シュペートの哲学におけるフッサール主義とヘーゲル主義」『ロシア思想史研究』1号 (通算5号)。

桑野隆 (2003) 「言語はロシアを救う？固有名の問題」『バフチンと全体主義』東京大学出版会、158-191。

シペート、グスタフ (2004) 『美的断章』加藤敏訳、水声社。

杉浦修一 (2006) 「ロシア・プラトニズムとウラジーミル・ソロヴィヨフ」『プラトンとロシア』I

野中進 (2011) 書評：Galina Tihanov (ed.). *Gustav Shpet's Contribution to Philosophy and Cultural Theory*. West Lafayette: Purdue UP, 2009、『ロシア語ロシア文学研究』43号。

『プラトンとロシア』I-III (2006-2008)、北海道大学スラブ研究センター21世紀COEプログラム研究報告集。

フロレンスキイ (1998) 『逆遠近法の詩学：芸術・言語論集』桑野隆他訳、水声社。

堀江広行 (2005) 「セルゲイ・ブルガーコフの『名前の哲学』とその人格 (リーチノスチ) の概念について」『ロシア史研究会』77号

フンボルト (1984) 『言語と精神—カヴィ語研究序説』亀山健吉訳、法政大学出版社。

ヘルビヒ、ゲーアハルト (1972) 『近代言語学史—とくに文法理論を中心に』岩崎英二郎他訳、白水社。

マンデリシタム (1999) 『言葉と文化：ポエジーをめぐって』斉藤毅訳、水声社。

山内志朗 (2008) 『普遍論争—近代の源流としての』平凡社ライブラリー。

ローセフ、A.F. (2006) 『神話学序説—表現・存在・生活をめぐる哲学』大須賀史和訳、成文社。

渡辺圭 (2004) 「二〇世紀初頭ロシア正教会における異端的活動「讃名派」論争—その概観と問題提起」『ロシア思想史研究』1号

Светликова И. Ю. (2005) *Истоки русского формализма: традиция психологизма и формальная школа*. М.: Новое литературное обозрение.

Galina Tihanov (ed.). (2009) *Gustav Shpet's Contribution to Philosophy and Cultural Theory*. West Lafayette: Purdue UP.